総合診療医師と療法士によるリハビリカンファレンスに関する活動報告

嘉本侑馬 1)、堀西祐多 2)

要　旨：背景：雲南市立病院（当院）は雲南圏域の中核病院として急性期病棟、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養型病棟の計 281 床で地域に医療を提供している。2022 年度より患者のリハビリテーションの目標設定や進捗状況、方向性の共有などを目的に、総合診療科患者のカンファレンスを開始した。
方法：カンファレンスの有益性と効率性を改善する目的で、カンファレンスに関するアンケート調査を行なった。
結果：アンケートでは、前向きな返答が多く、開催意義が感じられたが、開催方法や運営については修正を求める意見も散見された。
まとめ：医師と療法士間でのカンファレンスは、互いの意志の疎通向上や、退院までの目標設定の共有などが行え、有益と思われた。今後は、カンファレンスの開催・運営方式なども検討し、有益性と効率性を上げてゆく必要があると考える。
キーワード：カンファレンス、リハビリテーション、活動報告
（雲南市立病院医学雑誌　2019；19(1)：印刷中

はじめに

雲南市立病院（当院）は、雲南圏域の中核病院として急性期病棟、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養型病棟の計 281 床で医療提供している。2022 年度より、患者のリハビリテーションの目標設定やリハビリテーション進捗状況、方向性の共有などを目的に総合診療科医師が、主治医の患者を対象にカンファレンスを行なっている。今回、カンファレンスの有益性と効率性を改善する目的でアンケート調査を行なった。

方　　法

カンファレンス参加者を対象にカンファレンスに関するアンケートを Google form を利用し実施した。内容は「Q1：ケア科カンファレンスの開催は情報共有する上で有益だ」、「Q2：治療方針/リハビリ実施内容に変化があった」、「Q3：目標設定の参考になっている」、「Q4：退院支援を検討する上で参考となっている」、「Q5：双方（医師、療法士）がお互いの治療方針、訓練方針が理解できた」の 5 項目は「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の 3 件法で、選択と Q2 の設問に対して「はい」と返答した回答者には記述式の設問と自由記載の項目を設けた。

結　　果

参加者 24 名（療法士 17 名、医師 7 名）中 21 名分の回答が回収された（回収率 87%）。Q1 は「はい」

1)　雲南市立病院医療技術部リハビリテーション技術科、2) 雲南市立病院内科・地域ケア科
著者連絡先：嘉本侑馬　〒699-1221　島根県雲南市大東町飯田 96-1
電話番号：0854-47-7500
E-mail：hospital-soumu@city.unnan.shimane.jp
（受付日：2023 年 4 月 11 日、受理日：2023 年 4 月 20 日）

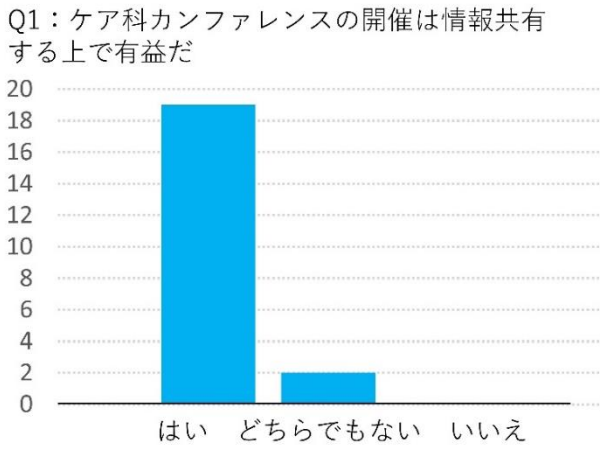

図 1 : アンケート質問内容 :「Q1 : ケア科カンファレンスの開催は情報共有する上で有益だ」への回答

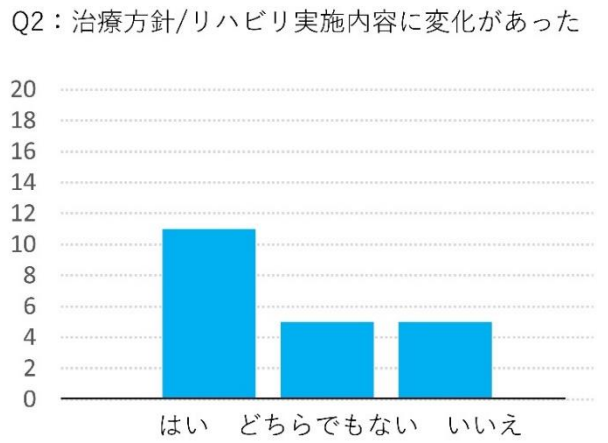

図 2 : アンケート質問内容 :「Q2 : 治療方針/リハビリ実施内容に変化があった」への回答

が 19 名、「いいえ」が 0 名であった(**図 1**)。Q2 は「はい」が 11 名、「いいえ」が 5 名であった(**図 2**)。Q3 は「はい」が 15 名、「いいえ」が 0 名であった(**図 3**)。Q4 は「はい」が 15 名、「いいえ」が 0 名であった(**図 4**) 。Q5 は「はい」が 17 名、「いいえ」が 1 名であった(**図 5**)。Q2 の設問に「はい」と返答した回答者の記述式回答では、前向きな返答が多かったが(**図 6**)、開催方法や運営については修正を求める意見が上がった(**図 7**)。

考　　察

今回初めて、医師と療法士間で双方向性で討論する

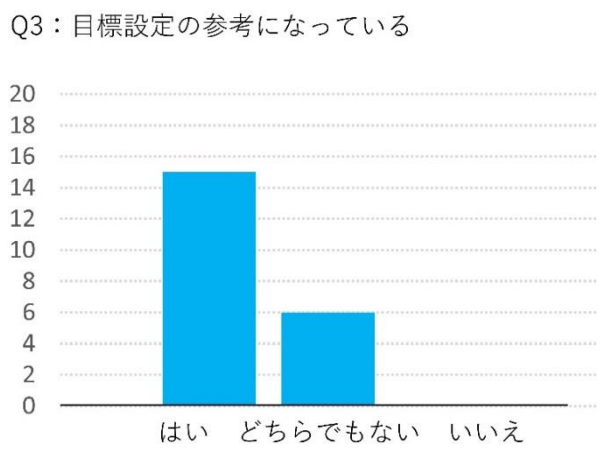

図 3 : アンケート質問内容 :「Q3 : 目標設定の参考になっている」への回答

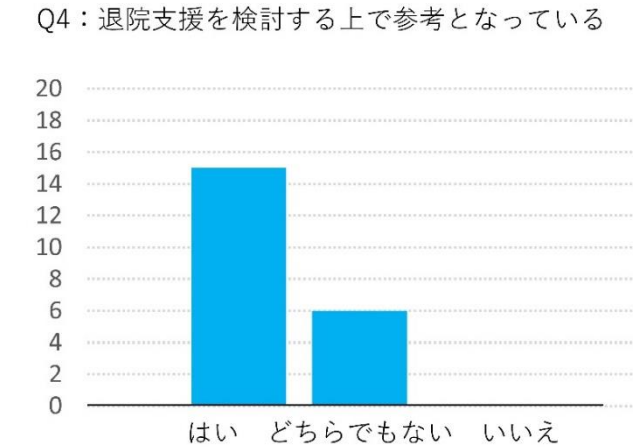

図 4 : アンケート質問内容 :「Q4 : 退院支援を検討する上で参考となっている」への回答

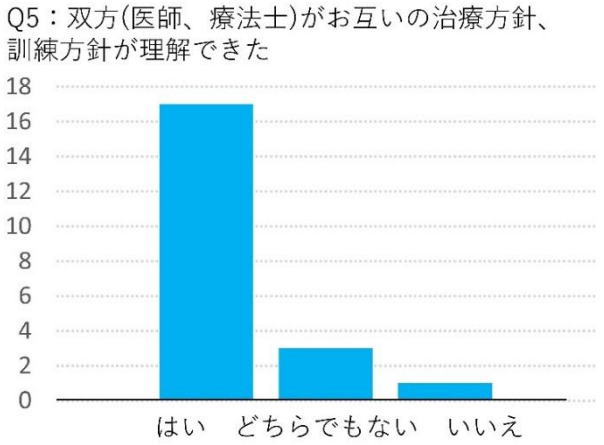

図 5 : アンケート質問内容 :「Q5 : 双方 (医師、療法士) が互いの治療方針、訓練方針が理解できた」への回答

・運動強度を上げることができた。
・治療経過や項療法を確認でき、ゴール期間などの目安、確認ができた。
・特に方向性が定まったことにより対応も変化した。
・方向性や治療方針などが確認できた。方向性が決まっていない患者や、病状説明がまだの患者の確認もできた。
・治療の方向性や終了時期がわかるようになったことで、退院の時期も予想できるようになり、ゴールも想定でき、訓練内容も変化した。
・治療方針を参考にリハビリテーションを進めることができた。
・定期的に患者について相互に話しができることは、リスク管理や方向性検討が行えて良い。
・リスク管理が行い易くなった。
・リスク管理が具体的となり、どこまで進めてよいのか判断できた。
・医師との距離が縮まり、普段から相談し易くなった。
・主治医にリハビリテーションの進捗状況や見立てを相談できる機会となり、有益に感じる。
・病棟で理学療法士から話しかけられることが増えた。
・相談や共有が行い易くなった。
・連携をとり易くなったと実感している。
・カンファランスがある事で、普段からリハビリテーションスタッフとコミュニケーションがとり易くなったように思える
・多職種とディスカッションすることで、視野が広がった。ICF の考え方が少しずつ身についてきた感じがする。
・疼痛コントロールの不足を指摘してもらい、加療強化した。

図 6：Q2 の設問で「はい」の回答者の記述式設問の自由記載回答：肯定的意見(赤字は医師の意見)

・医療相談員(MSW)なども参加が必要。まだ回数が少なく、担当患者がリストアップする機会が少ないので、もう少し機会が必要と感じている。
・医療相談員(MSW)もカンファランスに参加することでよりスムーズに退院調整が行えるうのではないかと思う。
・難しいケースでの方向性に関しての相談は医療相談員(MSW)や訪問事業、可能であれば病棟の管理職 1 名など多職種の意見もあるとよりスムーズに進め易いのでは。または、連携シート作成など、もしくは、カルテを開いた時にでる注意事項など記載されている欄に各職種ごとに状況記録やゴールの設定、方向性確認、変化があれば、その都度更新し、更新したことをカルテに記載することはどうか。
・その場で返答を貰いたいが、参加していない医師もいるため、その場での解決にならず、結果、電話や直接の相談が早い場合もある。
・患者の全体像を把握できているつもりになっていたが、ディスカッションすることで新たな視点が加わるのが良い。ファシリテータは日替わりでよいのでは。地域ケア科医師の参加率を上げたい。
・今後も、是非継続し、多職種で関与できるカンファランスに発展できると良いと考える。
・時間的な部分では、書面で解答できる部分にはカルテ上などに残してもらい、全体でディスカッションするべき内容は話し合いができればよいと思う。
・医師からのリハビリテーションの相談などがもっとあるとよい方向に進みそう。
・カンファランスの内容が、まだ固定化されていないこと、地域ケア科の患者が網羅されていないことが気になる。当院のように入院 1 週間の患者をリストアップし状態や治療方針、リハビリテーションの目標が共有できると良いかと思う。また、看護師、相談員など他部門スタッフも参加してもらい、地域ケア科だけでもリハビリテーションの病棟カンファランスとして捉えるようになるとよいと思う。
・長くつづけてゆきたい貴重な会議だと感じている。皆が忙しい中で参加するものでもあり、内容がズレてしまう事があり時間がもったいなく感じられるケースがある。極力端的な内容でスムーズな開催ができると良いと感じる、無駄に長くならず、時間内で終えれるようなディスカッションができるようにレベルアップが図れるよう意識してゆきたい。

図 7-1：Q2 の設問で「はい」の回答者の記述式設問の自由記載回答：運営の改善を求める意見(赤字は医師の意見)

・人数が多いので、発言者の声が聞き取りにくいことがある。
・人数が多すぎて、情報を処理しきれない。患者のピックアップと、もっと絞った方がよいと感じる。医師側、療法士側どちらからか対象者を提案する方が良いのでは。一度カンファランスに上げた患者は当分対象外でよいのではないだろうか。有意義なカンファランスだと思うが、医師も療法士もカンファランスにかけられる時間が限られていると思う。今のやり方だと時間外に患者の訓練や記録業務をしなければならず負担が大きい。
・カンファランス当番時、該当者を探す間にカルテ記載が間に合わず先に進むこともある。事前の該当患者名簿(Excel)の横への記載などではダメか？もしくは、該当患者の患者の担当者がカンファランス後にカルテに記載することなどでは(担当者不在の際は他スタッフへ現状報告を共にメモ依頼)。
・全部に参加すると長く感じる。
・受け持ち数が多いと、開始時刻に間に合わないことがある。
・1 日のリハビリテーションを行う患者数が多いと参加に遅れることがある。
・訓練士はあくまで医師の指示に従うのみ。

図 7-2：Q2 の設問で「はい」の回答者の記述式設問の自由記載回答：運営の改善を求める意見(赤字は医師の意見)

カンファレンスが開催となった。アンケートで前向きな返答が得られ開催意義が感じられたものの、記述式では開催方法や運営については修正を求める意見が上がった。過去の報告でも、医師とリハビリテーション技師とのカンファレンスや情報共有の重要性が強調されている[1)2)]。さらに、このリハビリテーション技師とのカンファレンスは、総合診療医の教育研修にも重要とした報告もある[3)]。今後は、継続的に開催方法などを検討し、退院支援の円滑化も図れるように検討しつつ、目的に沿った運用を検討していく必要性があると考えた。

ま　と　め

リハビリテーションの目標設定や進捗状況把握、方向性の共有などを目的とした医師・療法士間のカンファレンスによって、医師と療法士間での双方向性討論、疎通向上や退院までの目標設定などが行えた。開催方法の改善で、カンファレンスの有益性と効率性を上げていきたい。

本研究の要旨は日本医療マネジメント学会第 20 回島根県支部学術集会(2022、雲南)で発表した。

本報告に開示すべき利益相反はない。

文　　献

1) 夏加孝明、淺岡宏充、藤田俊広．医師・リハビリ間での情報共有の重要性　がん患者に対する、外科カンファレンス・回診にリハビリ職員が同行する意義の検討．地域リハビリテーション．2015;10:137-141.
2) 小林洋、矢吹省司．脊柱の外傷・障害の病態特性．理学療法．2021;38:388-396.
3) 齋藤正美、大塚吉則．総合診療専門医のリハビリテーション教育研修に関するセラピストの意識．理学療法科学．2018;33:473-479.

Activity report on rehabilitation conferences between general practitioners and therapists

Yuma Kamoto[1], Yuta Horinishi[2]

Abstract： As a core hospital in the Unnan area, Unnan City Hospital (our hospital) has provided medical care with a total of 281 beds, including an acute care ward, a community comprehensive care ward, a recovery stage rehabilitation ward, and a nursing care ward. Since the beginning of this fiscal year, the physicians of the Department of *i*nternal *m*edicine have held conferences for patients whose primary physicians are attending physicians to discuss the setting of rehabilitation goals, rehabilitation status, and direction of the patient's rehabilitation. We conducted a questionnaire survey to improve the usefulness and efficiency of future conferences and considered the need to examine how to continue holding such conferences and how to operate them following their objectives.
Key words: Conference, rehabilitation, activity report

1) Department of rehabilitation technology, Unnan City Hospital, 2) Department of internal medicine, Department of community care, Unnan City Hospital
Correspondence: Yuma Kamoto, Department of rehabilitation technology, Unnan City Hospital [96-1 Daito-cho Iida, Unnan, Shimane 699-1221, JAPAN]
Telephone: 0854-47-7500 / Fax: 0854-47-7501
E-mail: hospital-soumu@city.unnan.shimane.jp